

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）
令和3年度（2021年度）発生予報第1号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和3年度（2021年度）病虫害発生予報第1号（4月予報）

I 気象予報：令和3年（2021年）3月25日福岡管区气象台発表（単位：％）

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	10	20	70
	降水量	30	40	30
	日照時間	30	30	40

II 【今後、注意すべき病虫害】

1 発生の概要

作物	病虫害名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
麦	赤かび病	並	並	—	—	気温高(+) 降水並(±)	
茶	カンザワハダニ	やや多	並	並(±)	並(±)	気温高(+) 降水並(±)	茶業研究所 平年比多 (+)
カンキツ	ミカンハダニ	多	並	多(+)	やや多～並 (±)	気温高(+) 降水並(±)	
ナシ	黒星病	やや多	やや多	—	—	降水並(±)	
冬春 トマト	灰色かび病	やや多	並	茎葉やや多 果実やや多 (+)	並～やや少 (-)	降水並(±)	
	葉かび病	やや少	少	やや少 (-)	並～やや少 (-)	降水並(±)	



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/>

作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
冬春 トマト	すすかび病	やや少	並	やや少 (-)	並～やや少 (-)	降水並(±)	
	黄化葉巻病	並	並	黄化葉巻病 並(±) コナジラミ やや多(+)	並(±)	(コナジラミ) 気温高(+)	
冬春 ナス	うどんこ病	やや多	やや多	やや多(+)	並(±)	降水並(±)	
	すすかび病	並	並	並(±)	やや多～や や少(±)	降水並(±)	
冬春キ ュウリ	べと病	やや多	やや多	多(+)	やや多(+)	降水並(±)	
ウリ科 野菜	キュウリ・メロン 退緑黄化病 スイカ 退緑えそ病	並	並	退緑黄化病 並(±) コナジラミ 並(±)	キュウリ や や多 メロン 並～ 少 スイカ 並 (±)	(コナジラミ) 気温高(+)	
イチゴ	うどんこ病	並	やや多	並(±)	並(±)	降水並(±)	
	ハダニ類	並	やや多	並(±)	やや多～並 (+)	気温高(+)	
	アザミウマ類	多	並	多(+)	やや多(+)	気温高(+)	
冬春 果菜類	灰色かび病 (トマト除く)	並	並	キュウリ 並 ナス 並 イチゴ 並 (±)	キュウリ 並 ナス 並～や や少 イチゴ 並 (±)	降水並(±)	



作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
冬春 果菜類	タバコ コナジラミ	やや多	やや多	キュウリ 並 トマト や や多 ナス やや 多 (+)	キュウリ やや多 メロン やや多~少 スイカ 並 トマト やや 多~並 ナス やや多 ~やや少 (±)	気温高(+)	
	アザミウマ類 (イチゴ除く)	並	並	キュウリ やや多 ナス 並 (+)	キュウリ 並 メロン 並~ 少 スイカ 並~ やや少 ナス やや多 ~やや少 (-)	気温高(+)	
野菜 全般	アブラムシ類	並	並	キュウリ 並 トマト 並 ナス 並 イチゴ 多 (+)	キュウリ や や多 メロン やや 多~並 スイカ 並 トマト 並 ナス 並 イチゴ 並 (±)	気温高(+)	

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。



2 予想発生量、根拠、対策等

◎麦類

1) 赤かび病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア アメダス実測値（熊本市）を用いた赤かび病の発生予測では、3月28日現在までに多発条件は発生していない（－）。

(3) 対策 ア 赤かび病の主な感染時期は、大麦は蒴殻抽出期（穂揃い10日後）、小麦は開花期（出穂7～10日後）である。

イ 防除適期は、大麦は穂揃い期10日後頃（出穂期12～14日後）とその7～10日後。小麦は開花始～開花最盛期（出穂期7～10日後）とその7～10日後。

ウ 防除薬剤の効果は予防が主体であるため、適期に2回の防除を行う。

エ 麦類の出穂期や開花期等は気温に左右されるため、今後の生育状況に注意する。

（参考）麦作況生育調査における出穂期（合志市：農産園芸研究所作物研究室調べ）

麦種	品 種	本 年	前 年	平 年	平年比
大 麦	はるしづく	3月18日	3月20日	3月31日	13日早い
小 麦	シロガネコムギ	3月21日	3月21日	4月4日	14日早い

※赤かび病多発条件出現日の判定結果は病害虫防除所ホームページ（<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/>）に掲載し、随時更新します。

◎茶

1) カンザワハダニ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 3月の巡回調査では、寄生葉率2.5%（平年2.2%）で平年並の発生であった（±）。

イ 茶業研究所（御船町）の調査では、3月第4半旬の寄生葉率は14.0%（平年5.2%）と平年比多の発生であった（+）。

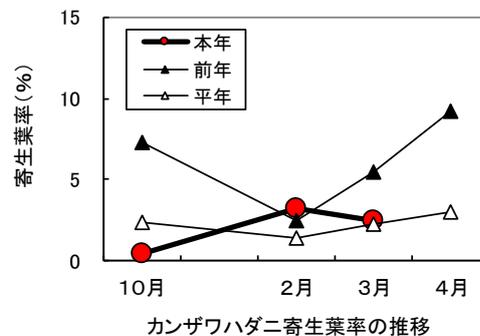
(3) 対策 ア 茶園をよく観察し、発生が目立つ場合は防除を行う。特に茶園の被覆を行う場合は、被覆前の入念な観察を心がける。

イ 一番茶摘採期を考慮し、使用前日数等を確認した上で薬剤を選定する。

ウ 防除にあたっては、薬剤が葉層の内部やすそ部の葉裏まで届くよう規定の散布量で丁寧に散布する。

エ 晩霜害を受けると、摘採時期の遅延等により本虫の被害が助長されるため、早めに対策を行う。

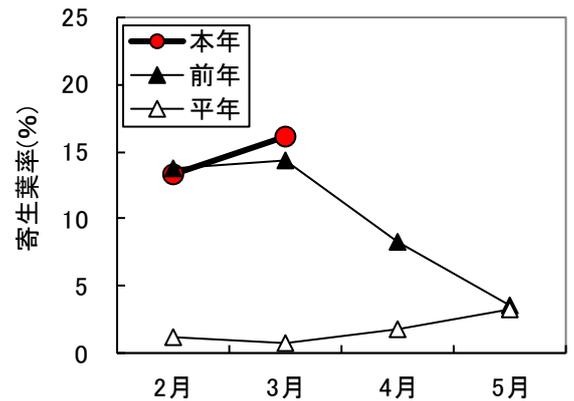
オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎カンキツ

1) ミカンハダニ

- (1) 発生量：多
- (2) 根拠 ア 3月の巡回調査では、寄生葉率16.2%（平年2.1%）、寄生頭数は8.6頭/10葉（平年0.5頭/10葉）と平年比多の発生であった（+）。
- (3) 対策 ア 越冬期にマシン油乳剤を散布しなかったほ場では、ミカンハダニの発生に注意し、4月以降の薬剤防除を徹底する。
イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

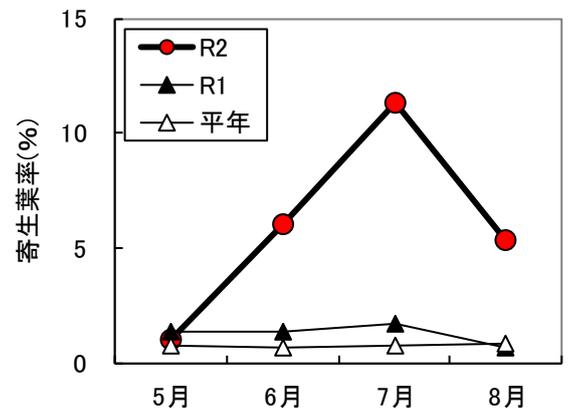


ミカンハダニの寄生葉率の推移

◎ナシ

1) 黒星病

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 黒星病は、前年の発生が多い場合、翌春の発生も多い傾向がある。前年は6月から8月にかけて平年比多の発生であった（+）。
イ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並の予想である（±）。
- (3) 対策 ア 落弁期以降の予防防除を徹底する。
イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。また、QoI系、DMI系及びSDHI系の薬剤は年間使用回数をそれぞれの系統で2回までとする。

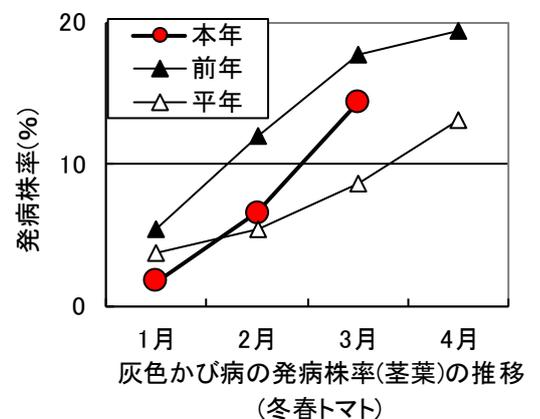


黒星病発病葉率の推移

◎冬春トマト

1) 灰色かび病

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 3月の巡回調査では、茎葉で発病株率14.3%（平年8.6%）で平年比やや多、果実で発病株率5.4%（平年0.5%）で平年比やや多の発生であった（+）。
イ 現在発生が見られるほ場では、曇雨天が続いた場合、施設内の湿度が高くなり、本病の発生に好適な条件となるため、さらに発生が拡大する可能性がある。
- (3) 対策 ア 発病果、発病葉、花卉は伝染源となるので、早期に除去し処分する。
イ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。
ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



灰色かび病の発病株率(茎葉)の推移 (冬春トマト)



2) 葉かび病

(1) 発生量：やや少

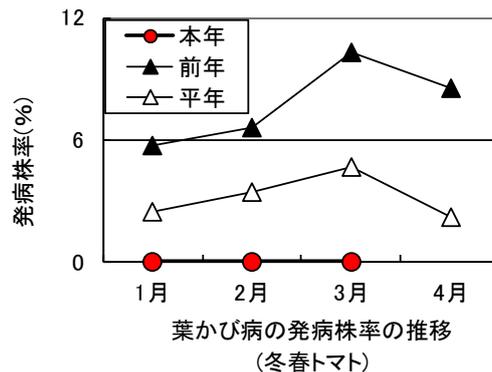
(2) 根拠 ア 3月の巡回調査では、発生は認められず(発病株率平年4.7%)、平年比やや少の発生であった(－)。

(3) 対策 ア 抵抗性品種であっても発病に注意し、発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

イ 発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。

ウ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



葉かび病の発病株率の推移
(冬春トマト)

3) すすかび病

(1) 発生量：やや少

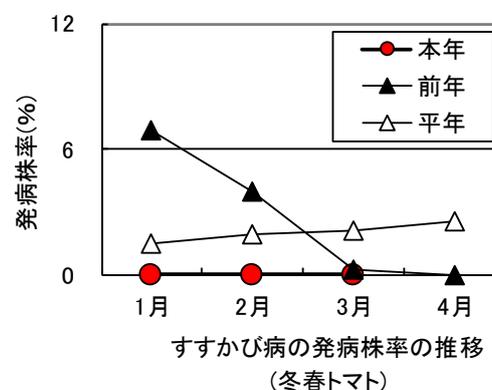
(2) 根拠 ア 3月の巡回調査では、発生は認められず(発病株率平年2.1%)、平年比やや少の発生であった(－)。

(3) 対策 ア 発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

イ 発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。

ウ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



すすかび病の発病株率の推移
(冬春トマト)

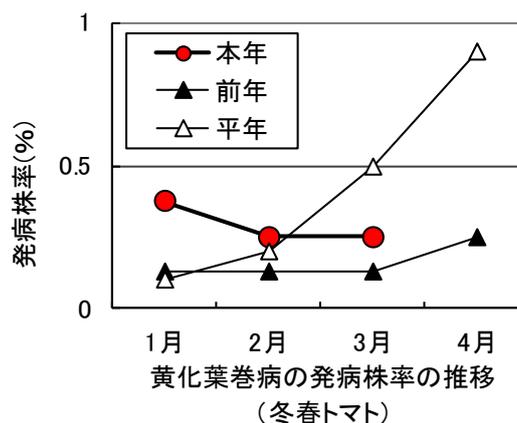
4) 黄化葉巻病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 3月の巡回調査では、発病株率0.3% (平年0.5%) で、平年並の発生であった(±)。

イ 同巡回調査において、タバココナジラミは寄生葉率1.1% (平年0.1%) で、平年比やや多であった(+)

(3) 対策 ア 保毒虫を施設内で「増やさない」対策および「出さない」対策を徹底する(3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照)。



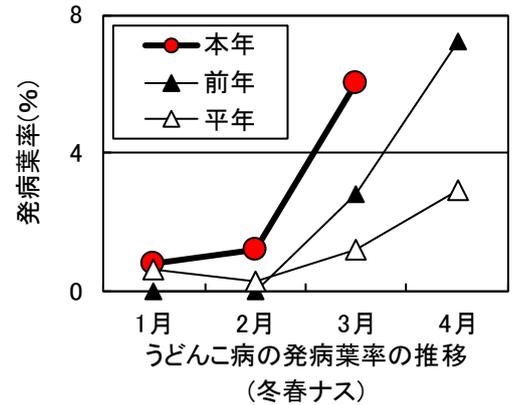
黄化葉巻病の発病株率の推移
(冬春トマト)



◎冬春ナス

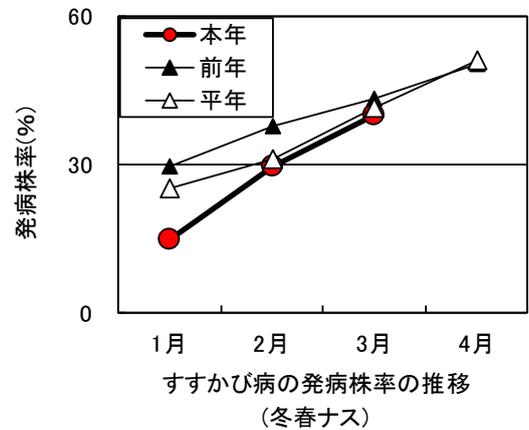
1) うどんこ病

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 3月の巡回調査では、発病株率6.0%（平年1.2%）で、平年比やや多の発生であった（+）。
- (3) 対策 ア 発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。
 イ 多発後は、防除が困難なので初期防除を徹底する。
 ウ 多肥や過繁茂を避け、適正な管理を行う。
 エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) すずかび病

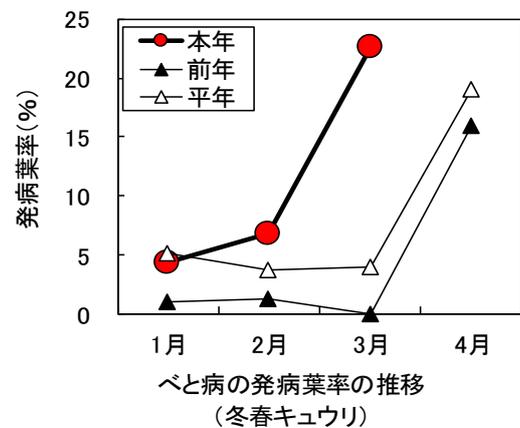
- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 3月の巡回調査では、発病株率40.0%（平年41.5%）で平年並の発生であった（±）。
- (3) 対策 ア 発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。
 イ 発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。
 ウ 発病葉や施設資材上に付着した病原菌が次作の伝染源となるため、発生が多い場合は、栽培終了後に太陽熱消毒を行い、病原菌密度を低下させる。
 エ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。
 オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎キュウリ

1) ベと病

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 3月の巡回調査では、発病株率22.7%（平年4.0%）で平年比多の発生であった（+）。
- (3) 対策 ア 湿度が高い条件や肥料切れで多発するので、過湿を避け、肥培管理に注意する。
 イ 多発生後は防除が困難なので初期防除を徹底し、薬剤が葉裏に十分かかるように散布する。
 ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎ウリ科野菜

1) キュウリ退緑黄化病、メロン退緑黄化病、スイカ退緑えそ病

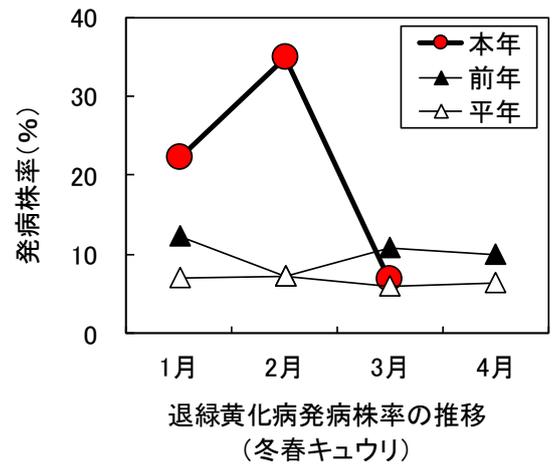
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 3月の巡回調査では、キュウリにおいて、発病株率6.8%（平年5.9%）で平年並の発生であった（±）。

イ 同月の巡回調査では、キュウリのタバココナジラミにおいて、寄生葉率0.7%（平年0.8%）で、平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 保毒虫を施設内で「増やさない」対策および「出さない」対策を徹底する

（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。



◎イチゴ

1) うどんこ病

(1) 発生量：並

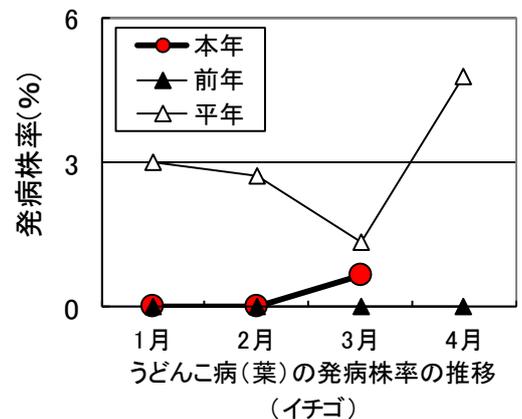
(2) 根拠 ア 3月の巡回調査では、発病株率0.7%（平年1.3%）で、平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 多発生後は防除が困難なので、初期防除を徹底する。

イ 発病果、発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

ウ 薬剤防除は葉裏に十分かかるように散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) ハダニ類

(1) 発生量：並

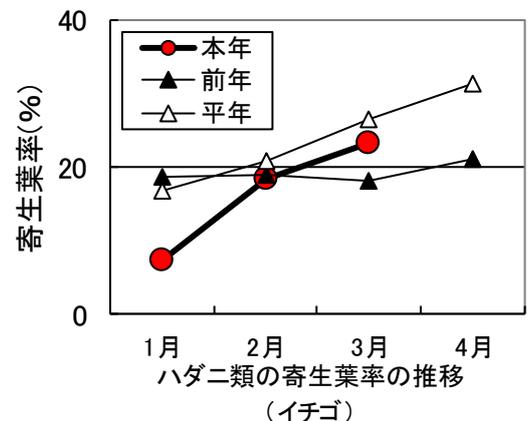
(2) 根拠 ア 3月の巡回調査では、寄生葉率23.3%（平年26.5%）で、平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 先月発生が少なかったほ場でも、気温の上昇に伴い、急激に個体数が増加したり、局所的に多発生している事例も見られたため、ほ場を注意深く観察し、発生初期からの防除を徹底する。

イ 寄生葉を早めに取り除き、ほ場外で処分する。

ウ 薬剤防除の際、事前に下葉かぎを行い、葉裏にも十分かかるように丁寧に散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3) アザミウマ類

(1) 発生量：多

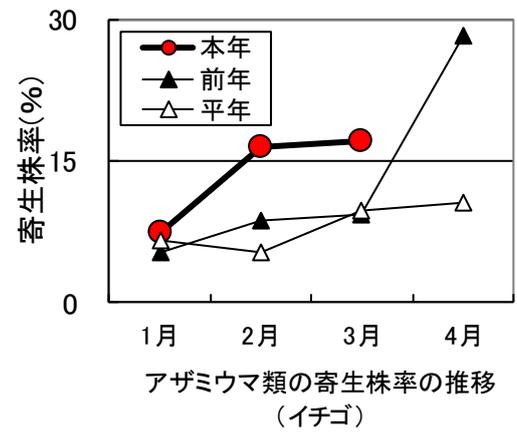
(2) 根拠 ア 3月の巡回調査では、寄生株率17.0%（平年9.7%）で、平年比多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア これからの時期は、気温の上昇に伴い、施設内での発生が増加するとともに、施設外からの飛び込みも多くなるため、花を注意深く観察し、発生初期からの防除を徹底する。

イ 施設内外の雑草は、重要な発生源となるため、開花する前に除草する。

ウ 薬剤防除にあたっては、天敵や訪花昆虫（ミツバチ等）への影響を考慮し、薬剤を選定する。ただし、成虫の発生が多い場合は、アザミウマ類の防除を優先し、アザミウマ類成虫に効果の高い薬剤を選択する。その場合、天敵にも大きく影響するため、散布後のハダニ類の増加に注意する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

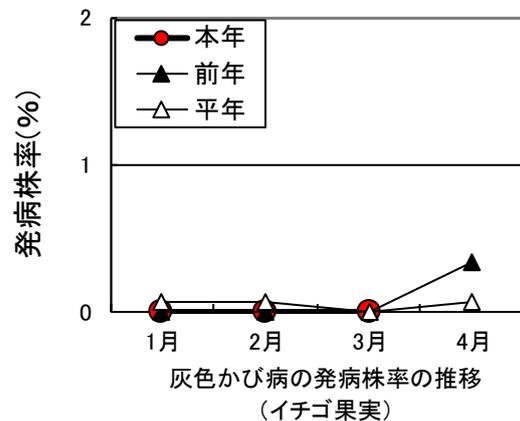
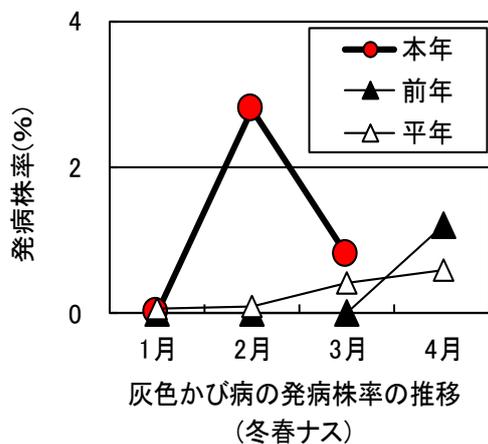


◎冬春果菜類

1) 灰色かび病（トマト除く）

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 3月の巡回調査では、キュウリで発病株は確認されず（発病株率平年0.5%）平年並、ナスで発病株率0.8%（平年0.4%）で平年並、イチゴで発病株は確認されず（発病株率平年0.1%）平年並の発生であった（±）。



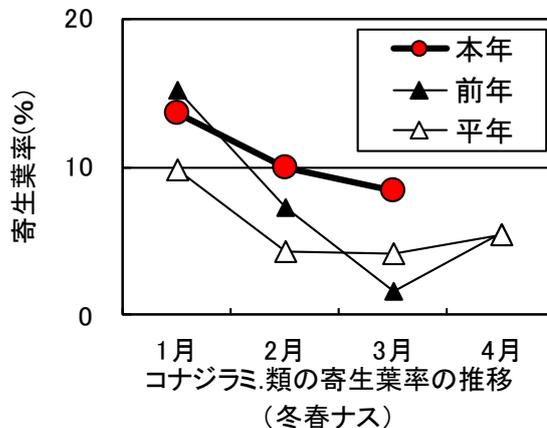
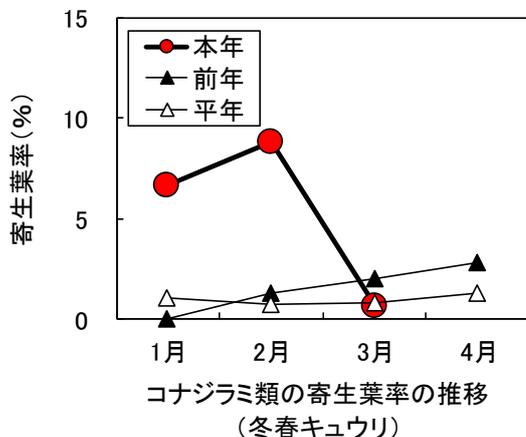
(3) 対策 ア 発病果、発病葉、花弁は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。
 イ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。
 ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) タバココナジラミ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 3月の巡回調査では、キュウリで寄生葉率0.7%（平年0.8%）で平年並、ナスで寄生葉率8.4%（平年4.2%）で平年比やや多、トマトで寄生葉率1.1%（平年0.1%）で平年比多、イチゴで寄生葉は確認されず（寄生葉率平年0.0%）平年並の発生であった（+）。



(3) 対策 ア タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、トマト黄化病、ウリ類退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、トマト、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。

イ 施設内部の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

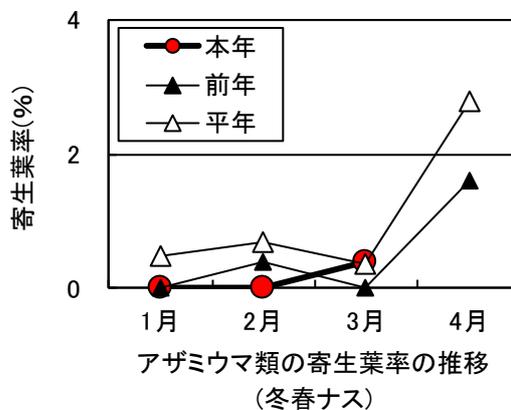
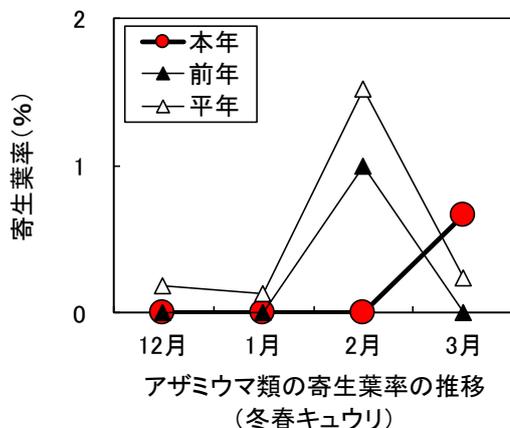
ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、早期発見に努める。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

3) アザミウマ類（イチゴ除く）

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 3月の巡回調査では、ナスで寄生葉率0.4%（平年0.4%）で平年並、キュウリで寄生葉率0.7%（平年0.2%）で平年比やや多の発生であった（±）。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/>

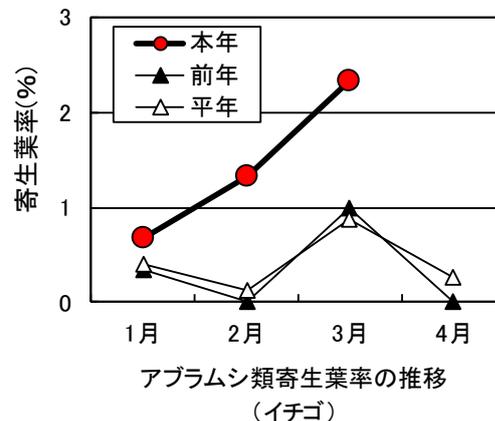
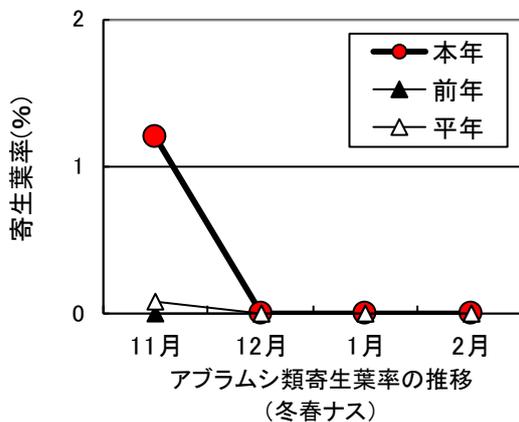
- (3) 対策
- ア これからの時期は、施設内での発生が増加するので、粘着トラップを設置し、早期発見に努め、早めの防除を徹底する。ミナミキイロアザミウマに対する粘着トラップは青色を使用する。
 - イ ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。
 - ウ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。
 - エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

◎野菜全般

1) アブラムシ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 3月の巡回調査では、キュウリで寄生葉は確認されず（寄生葉率平年0.1%）平年並、トマトで寄生葉は確認されず（寄生葉率平年0.0%）平年並、ナスで寄生葉は確認されず（寄生葉率平年0.5%）平年並、イチゴで寄生葉率2.3%（平年0.9%）で平年比多の発生であった（+）。



- (3) 対策
- ア 気温の上昇に伴い、有翅虫の飛来が多くなるため、発生に注意し、早い時期からの防除を徹底する。
 - イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3 防除のポイント等

イネいもち病の防除対策について

いもち病は保菌種籾を第一次伝染源として苗で本田へと持ち込まれます。そのため、保菌種籾から苗への感染を防ぐことが重要です。

- (1) いもち病は種子伝染する。購入種子を使用する場合も塩水選と種子消毒を徹底する。
- (2) 登録農薬での浸漬処理では、薬液が行き渡るように網袋等に籾を入れ過ぎないようにする。また、薬液の温度は10℃以上とする。
- (3) 温湯消毒では、温度管理を適正に行う。
- (4) 種子消毒後の苗にいもち病菌を感染させないため、育苗床に被害わらや籾がらを持ち込まない。
- (5) 余り苗及び補植用苗は、伝染源となりやすいので、本ぼに長期間置かない。

スクミリンゴガイの防除対策について

本年は1月下旬以降、例年より気温が高く推移しています。暖冬の場合、越冬したスクミリンゴガイの生存率が高くなるため、発生量が多くなることが懸念されます。水温が15℃を超えると活動を開始しますので、移植後はほ場をよく観察して、以下の防除対策を徹底しましょう。

- (1) 水路から水田への侵入を防ぐため、取水口および排水口は金網（4mm以下）で覆う。さらに、排水口は、常に排水路の水面より高くなる場所に配置する。
- (2) 深水管理すると被害が大きくなるので、発生が多い水田では水深1cm以下の浅水管理を行う。
- (3) 移植後に水田内の貝が多いときは捕獲する。特に、浸冠水後は貝が侵入しているので、見回り捕獲する。
- (4) 薬剤防除を行う。薬剤には貝が摂食して殺貝効果が現れる剤（メタアルデヒド等）と行動抑制する剤（カルタップ等）があり、これらは併用しない。

イチゴ親株におけるうどんこ病、ハダニ類の防除対策

～次作での発生リスク低減に向けて～

本作は、本ぼにおけるうどんこ病の発生は少なく推移していましたが、ハダニ類は平年並の発生状況となっています。次作でも引き続き多発生させないためには、病原菌やハダニ類を親株に持ち込まないことが重要ですので、以下の対策を徹底しましょう。

【うどんこ病の防除対策】

- (1) 本ぼからの持ち込みを防ぐため、親株ほの管理作業は最初に行う。
- (2) 親株での発生に注意し、発病後は直ちに薬剤防除を行う。
- (3) 発病葉は伝染源となるため、早期に除去し、処分する。
- (4) 薬剤防除は葉裏に十分かかるように散布する。
- (5) うどんこ病菌はイチゴでのみ寄生がくり返されるため、定期的に苗の更新を行い、菌の伝染環を断ち切る。

【ハダニ類の防除対策】

- (1) 本ぼからの持ち込みを防ぐため、親株ほの管理作業は最初に行う。
- (2) 本ぼで除去した老化葉や収穫終了後の株をほ場周辺に放置しない。
- (3) ほ場周辺の雑草は発生源となるので、除草を徹底する。
- (4) 薬剤防除の際は、効果を高めるために事前に下葉かぎを行い、十分な液量で薬液が葉裏に十分かかるように丁寧に散布し、散布むらをなくす。
- (5) 育苗期は気門封鎖剤などの物理的資材を積極的に活用する。気門封鎖剤は、ハダニ類に直接付着しないと効果がないため、特に丁寧に散布する。また、卵への効果や残効性が低いいため、7日程度の間隔で複数回散布する。



野菜のウイルス病まん延を防止しましょう

本県では「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「スイカ退緑えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

これら微小害虫は、気温が高くなると活動が活発になり、今後、ハウス内の換気や栽培終了に伴って、ウイルスを持った虫（保毒虫）の施設外への拡散が懸念されます。

そこで、確実にウイルスの伝染環（つながり）を絶ち、地域におけるウイルス病の拡大を防ぐため、以下の2つの対策を必ず行いましょう。

I. 保毒虫を「増やさない」対策

施設内で微小害虫を増やさないようにし、栽培終了後に保毒虫が野外へ飛び出す危険性を減らしましょう。

- ① 発病株は重要な伝染源となるので、適正に処分する。
- ② ハウス内に粘着トラップを設置し、害虫の密度を低下させる。
- ③ コナジラミ類の発生がみられるほ場では、継続した防除を行う。
- ④ トマト黄化葉巻病抵抗性品種であっても、トマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV）に感染し伝染源となるため、コナジラミ類の防除を継続して行う。
- ⑤ ウリ類の連続栽培を行う場合は、保毒虫を次作に持ち越さないように防除を行う。

II. 保毒虫を施設外に「出さない」対策

地域（野外）の保毒虫密度を高めないために、ハウス内から微小害虫を逃がさないようにしましょう。

◇栽培中の「出さない」対策

- ① 定期的に施設周辺を見回り、ハウスビニルや防虫ネットに破れが無いか点検し、必要に応じて修繕を行う。
- ② 成虫に効果の高い剤を主体とした薬剤防除を行う。

◇栽培終了後の「出さない」対策

- ① 微小害虫の施設外への飛び出しを防ぐため、栽培終了後は必ずハウスを密閉してから一斉に植物を枯らす。
- ② 悪天候等で作物の枯死に時間がかかると予想される場合には、古株枯死に使用できる薬剤^{注1}の併用も検討する。なお、使用にあたっては、必ずラベルなどで使用方法を確認し、遵守する。
- ③ 地域で取り決めた密閉処理期間を遵守し、微小害虫及びウイルスを完全に死滅させる。
- ④ 施設内の片付けは、密閉処理が終了してから行う。

注1) 令和3年3月31日現在において使用可能な薬剤は以下のとおり

- ・カーバムナトリウム塩液剤（商品名：キルパー）
 - ・クロロピクリンくん蒸剤（商品名：クロピクフロー）
- ※クロロピクリンくん蒸剤のうち使用できるのはフロー剤のみ



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jpjn.ne.jp/kumamoto/>

Ⅲ 【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
カンキツ	そうか病	並	巡回調査では平年並（±）。 防除効果が高い幼芽期（新芽が5mm以内）に防除する。
	かいよう病	並	巡回調査では一部ほ場で発生がみられ平年比やや多（+）。 果実への感染を防止するため、春葉の防除を行う。
ナシ	赤星病	並	前年の巡回調査は、調査期間を通して平年並（±） 黒星病との同時防除を行う。
キュウリ	うどんこ病	並	巡回調査は、平年並（±）。 多発後は防除が困難なので、発生初期の防除を徹底する。
メロン	べと病	並	防除員報告は、平年並～やや少（±）。 肥料切れで多発するので、適正な肥培管理を行う。
	つる枯病	並	防除員報告は、平年並～やや少（±）。 灌水は直接株元に行わず、株元周辺を出来るだけ乾燥状態に保つ。
スイカ	つる枯病	並	防除員報告は、平年並～やや少（±）。 灌水は直接株元に行わず、株元周辺を出来るだけ乾燥状態に保つ。
【野菜病害虫の共通対策事項】 <ul style="list-style-type: none"> ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める（病害）。 ・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。 			



IV その他

病害虫防除所ホームページに掲載される情報について

熊本県病害虫防除所のホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>) では、発生予報のほか、下記の病害虫の発生状況調査結果や防除に関する情報を掲載し、随時更新します。

対象作物名	病害虫名	調査方法	調査期間
水稻	いもち病	BLASTAMによる好適条件出現日	4月～10月
	トビイロウンカ セジロウンカ	予察灯 ネットトラップ 今年の飛来情報	4月～10月
	ヒメトビウンカ	予察灯	
	コブノメイガ	コーントラップ(フェロモン)	6月～8月
	クモヘリカメムシ	発生予測結果(アメダス版)	6月
麦類	赤かび病	多発条件出現日	3月～5月
果樹	チャノキイロアザミウマ	発生ピーク予測	6月～10月
	カメムシ類	予察灯・フェロモントラップ	4月～10月
		ヒノキ球果口針鞘数調査	7月～9月
茶	チャノコカクモンハマキ チャハマキ チャノホソガ	フェロモントラップ	4月～10月
	チャノキイロアザミウマ	黄色粘着板	
	クワシロカイガラムシ	ふ化最盛日予測	5月～9月
野菜	ハスモンヨトウ オオタバコガ コナガ シロイチモジヨトウ	フェロモントラップ	4月～10月
	アブラムシ	黄色水盤	
イグサ	イグサシンムシガ	越冬調査	3月
		予察灯	4月～10月
		第一世代発蛾最盛期予測 (有効積算温度)	4月～5月
露地作物	ツマジロクサヨトウ	フェロモントラップ	4月～11月

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎ 詳しい内容等については 病害虫防除所（生産環境研究所病害虫研究室）
（TEL：096-248-6490）にお問い合わせ下さい。

※なお、本文及び各種トラップのデータ等はホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

[「http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/」](http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/)